

「水田の一年生イネ科雑草」への参入を開始したヌカキビ

森田 弘彦

全国に分布するイネ科の一年生植物ヌカキビ (*Panicum bisulcatum* Thunb. 図-1) は、その生育地について、「野原、川の堤防、みぞ、水田の畦畔などやや湿地(笠原安夫 日本雑草図説 1968)」、「畦畔、林縁、道端、空き地、河原(浅井元朗 雑草大鑑 2014)」のように記述されてきた。1960年代、笠原先生の図説でのヌカキビの「発生量と害度」は、水田：弱害草、畑：全国害草で、畑に重きを置いた評価であった(表-1)。市街地にも普通に見られる(図-2)が、「やや湿地」とあるとおり水田の周辺にはどこでも生育するものの、「水田の中に生育する」と明記した植物の図鑑やガイドブックは極めて少なく、「沼田 真・吉沢長人 日本原色雑

表-1 1960年代以前におけるヌカキビの発生量と害度

種名	北海道	三陸	両羽	北陸	東山	東海	山陰	瀬戸内	北九州	南海	平均	害度
ヌカキビ	5	4	3	3	3	4	3	3	3	4	3.5	水田△畑○

発生量 +:発生量の不明のもの, 0:発生しない, 1:稀に発生する, 2:点々と少数発生する, 3:少数だが広く発生する, 4:やや多く発生する, 5:地域内に多数発生する

害度 ○:全国害草, △:弱害草

〔笠原安夫 日本雑草図説 1968〕より抽出

草図鑑 1968」に「・・野原や道ばた、畑地、水田やあぜなどに最も普通に生育する。」との記述を見いだせる程度である。

筆者は1990年代の後半に、畦畔から稈を伸ばして水田内に侵入する「ヤベヅル(夜這い蔓)」と呼ばれるイネ科多年生雑草を調べたことがあり、その過程で畦に近いイネの中で生育するヌカキビを見かけたが、一年生植物であることから対象から外した。時は過ぎて2016年の秋に、栃木県南部の湛水直播水田で繁茂したイネ科雑草の問い合わせがあり、送付していただいた実物を確認したところ、これはオオクサキビ (*P. dichotomiflorum*) であった。すでに乾田直播水田で問題になっていたオオクサキビが湛水水田でも発生したことに興味を持ったので、地図をいただいて現地へ赴いたところ、オオクサキビの繁茂したくだんの湛水水田の近くには、オオクサキビと張り合うようにヌカキビの繁茂するほ場も数筆あった。畦の近くに限らず、田の広い範囲でイネの穂の上を紫褐色の穂で覆った様(図-3の黄色枠)を初めて見て、ヌカキビが水田雑草の立場を主張し始めたように感じた。次いで2019年の初冬には、植調協会事務局の某氏を通じて、茨城県中部の飼料用稲栽培田で繁茂したイネ科雑草の問い合わせがあり、「イネ収穫後でも雑草の残渣ぐらいいあるのでは」と送付を依頼したところ、生産者からイネ科植物の基部の数片の試料を送付していただいた(図-4左)。試料は同定のカギとなる穂を欠いていて多分に迷ったが、「地上の節から伸びる気根状の根、葉鞘の合わせ目に並ぶ短毛(図-4-右)」から、この植物をヌカキビと考えた。現地での状況を見ようと出かけたところ、該当する水田まではたどり着かなかったものの、同じ市内には、枯れたヌカキビが畦畔全面を覆った秋耕後の水田も見られた(図-5)。ここではイネの生育期間中にはヌカキビは水田内にも繁茂したと考えた。さらに、宮

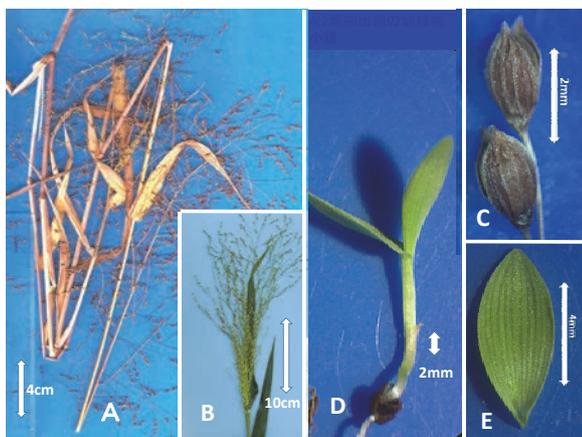


図-1 一年生イネ科雑草ヌカキビの形態
(A:成熟、枯死後の着穂稈, B:出穂途上の穂, C:成熟した小穂, D:2葉期の幼植物, E:第1葉の表面)



図-2 都市部の空き地に生育するヌカキビ
(大阪市淀川区, 新大阪駅付近, 2017年)



図-3 水田の内部にオオクサキビやメヒシバ（灰白色の部分）とともに繁茂したヌカキビ（線内の紫褐色の部分）が穂：栃木県南部、2016年



図-5 畔の全面に繁茂したヌカキビ、秋耕の前には水田の内部にも？（茨城県中部、2019年）

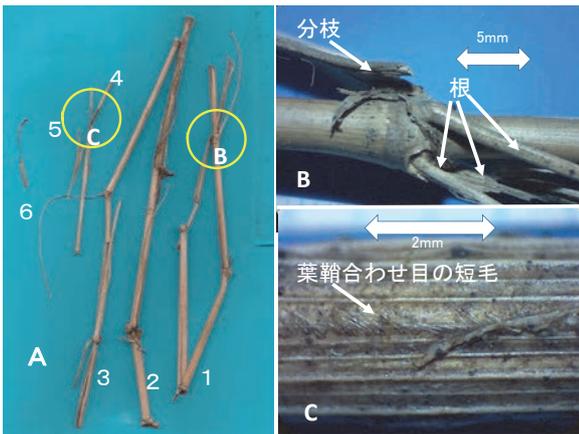


図-4 茨城県中部の飼料用稲の水田に繁茂したイネ科雑草の残渣（A：1～6）を、節からの発根（B）および葉鞘合わせ目の短毛（C）からヌカキビと同定

城県古川農試では乾田直播の試験水田でオオクサキビにヌカキビが混じることがある、との話を2018年7月に聞いた。茨城県の発生田でのイネの栽培様式は不詳であるが、ヌカキビが大っぴらに生育できるような「隙間」が水田の中にできてきているようで、この種を水田の雑草と扱う時期に来たのであろう。

山口裕文先生監修の「雑草学入門 2018」の「文化資源と生物活用」の章で、雑草を使った生け花材料の一つにヌカキビが紹介されたので、その引用元（小林南水子 生け雑草2017）の「ミチタネツケバナとヌカキビ」とある写真ページをのぞいてみた。早春と夏秋と花期を異にする花材の配合に興味をひかれたが、このページの写真のイネ科植物はヌカキビではなく、ミチタネツケバナと花期が重なるスズメノカタビラであった。ヌカキビの穂も十分に鑑賞に堪えると思うが、「パニカム」の名で日本でも花材として流通しているのは、*Panicum virgatum* L.で、「Switch grassの英語名で“Rubrum”や“Strictum”の品種があり、カナダからアメリカ合衆国を原産地とする多年生植物、（庭園では）細く直立して生育し、理想的なアクセント植物になる（R. Grounds Ornamental

Grasses 1979)。」とある。2014年に香川県で野生化した本種が採集され、「アメリカクサキビ」と名付けられた（茨木ほか 植物研究雑誌 92 2017）。

野生のイネ科植物はしばしば飼料に供されるが、ヌカキビは「全国のお原野耕地路傍に普通に自生する1年生草本。・・農用価値なき雑草（牧野忠夫 ポケット牧草図鑑 禾本科（イネ科）編 1958)。」と、国内の飼料資源としては評価されなかった。

多くはないものの方言名が採録されていて、「ミコスズ（新潟）、チロリングサ（佐賀白石）、ガラガラグサ・オドリグサ（和歌山敷屋）（八坂書房 日本植物方言集成 2001、佐賀植物友の会 佐賀の植物方言と民俗 1977、梅本信也 紀州里域植物方言集 2002）」は、穂や小穂に注目した子供たちによる命名であろうし、熊本県唐津地方での「ホトクリ、ホトクレ、ムシノホトクレ（乙益正隆 熊本県植物方言と民俗 1998）」は、乙益氏によればメヒシバの方言名の借用で「・ホトとは女性の陰部のことで、語源はホトコソグリといわれる。」とのことで、多分出穂前の草丈の程度を言ったものであろう。「・・短稈で、これが大人のマタまで伸びると6石は確実に取れる」という皮麦（オオムギ）に「金玉（きんぎょく）六石」の品種名（後藤虎男 作物品種名雑考（麦類） 1983）の由来と通じるところがある。

ヌカキビはどこにでも見られるイネ科植物であるが、除草剤の販売促進用の雑草写真集などで、サヤヌカグサのページに載るような画像の誤用が時々ある。本種には、「1. 稈の基部から長い支持根（植物を支える根）を出す。・・4. 葉鞘のへりには、直角方向に出る毛が列になって生える。（家永善文ほか 新訂 図解植物観察事典 1993）」という極めて分かりやすい形態的特徴があるので、水田の雑草とその防除に携わる方々には、確かなヌカキビの姿を目に焼き付けて、その動向を観察して下さるようお願いしたい。